

鹿児島県沖永良部島「移住者10人の声」

VOICE





吉成 泰恵子さん(31) 2014年横浜市からRターン
家族構成：夫婦 / 職業：島民泊・カフェオーナー

幼い頃から母の故郷である沖永良部島を訪れていて、いつの日かこの島で暮らせたらいいなと思っていました。自分が思い描いているライフスタイルは、都会では難しいのかなと感じていた中、和泊町で地域おこし協力隊を募集していることを知り応募。協力隊の3年間は、島での生活を始めるにあたり大きな意味がありました。島に来て同世代を中心に色々な人と話すと、求めていることやこういうことをやったら面白いのではということが、少しずつ見えてきました。その一つが、2017年12月にオープンしたコミュニティカフェ「赤土(あ〜みちや) Café」です。都会に住んでいた頃は、仕事を何時までに終わらせなくてはと時間に追われている感じでしたが、島に移住してからは、丁寧にリラックスしてやりたいことに取り組めます。地域活動で戸惑うこともあると思いますが、まずは島のことを理解することだと思います。その姿勢を見て島の人々は歩み寄ってきてくれます。そのやり取りの繰り返して信頼が深まっていくのだと思います。



田中 甫さん(29) 2014年東京都からUターン
家族構成：夫婦・子ども2人 / 職業：マンゴー農家

祖母の葬式で帰省した時に、親が急に老けたと感じUターンを決め、1年後に戻ってきました。両親に「マンゴーづくりをやりたい」と伝えると、「マンゴーづくりをなめるな」と父親に言われたのを今でも覚えています。あれから5年、両親と一緒にマンゴーづくりをやっています。ブランドづくりの一貫で、かごしまの農林水産物認証制度「K-GAP」を取得。いいものを作っている自信があるので、それなりの価格で販売できたらと思っています。島に戻って2カ月後に、休暇で帰省していた妻と知り合いました。Uターンする気がなかった妻を1年かけて口説きました。妻に言わせるとアプローチがすごかったらしいです。1年半くらいの遠距離恋愛を経て結婚、1年後に長男が生まれました。トントン拍子の展開に自分自身がびっくりしています。同世代のUターン者が少しずつ増えてきて、同級生をはじめ子育ての仲間と家族ぐるみの交流ができ、島に帰ってきてよかったと思います。何よりも両親の近くで子育てができてよかったです。





要 笑子さん(40) 2015年大阪市からIターン 家族構成：夫婦 / 職業：グラフィックデザイナー

沖永良部島へ移住すると同時にフリーランスになりました。1年目は、前職場のつながりからの仕事もあり5割以上は島外の仕事でした。次第に割合が変わり、今では8割が島内の仕事です。島内の仕事は、エンドユーザーの顔が見えてダイレクトに反応を感じられるのがいいです。「あのポスター、要さんが作ったの？いいね!」と言われると嬉しく、それがモチベーションとなり、さらに喜んでもらうために、もっと勉強しようと思います。美術関係への進学を目指している高校生にデッサンを教える機会があり、その時に島の子ども達が置かれている現状を知り、何かしたいと思いました。自分だったら何ができるかと考え、「絵を描く楽しさを教えること」だと思い、臨床美術士の資格を取りました。絵を描くことで脳を活性化させる臨床美術は、認知症や発達障害など子どもケアの分野で効用が期待されていて、高齢者、子どもが多い島で役立てたいと資格を取りました。離島でもこんなことができるとう島の子ども達に伝えられたらと思っています。



西 温子さん(40) 2016年福岡市からIターン 家族構成：夫婦・子ども1人 / 職業：観光協会職員

出産をきっかけに、本格的に移住を考えました。私も夫も島好きだったので、移住するなら島がいいなと思っていました。それぞれが行った島を挙げて、「南の島がいいね」「観光地化されてなく手つかずの自然が残っている島がいいね」「ハブがない島がいいね」と条件を出していくと沖永良部島と与論島に落ち着きました。移住体験ツアーに夫が一人で参加。住宅、子育て環境、スーパー、病院の見学、先輩移住者との交流など島暮らしに触れるいい機会でした。その時に紹介された住まいを借りる手続きをして、仕事は決めずに3カ月後に移住しました。地元の人に受け入れられず島で苦勞することもあるだろう、仕事が見つからず半年ほどで貯金が尽きて福岡に戻るようになるかもしれない、最悪なことを想定していました。それがよかったのか、ストレスになるようなギャップは今のところありません。描いていた生活と違うと感じたら戻ってやり直せばいいと思います。移住先で経験したことは、無駄にはならないと思います。





朝戸 慎治さん(40) 2013年横浜市からUターン

家族構成：夫婦・子ども1人 / 職業：鍼灸・マッサージ師

幼少期に数年沖永良部島に住んでいたのですが、その頃見た島の景色が忘れられず、将来は島で暮らしたいと思ってました。将来の島での暮らしを考え、手に職をつけるために鍼灸・マッサージ学校に通い、鍼灸師の資格を取りました。横浜で鍼灸師として働いていましたが、子供が生まれ「子供が小さいうちに島に帰りたいね」と夫婦で話し合い、島に帰ってきました。移住1カ月後に、夫婦で鍼灸・マッサージ院を開業。開業当初、お客さんはチラホラという状況でした。施術を通して島の人たちの体に触れて行くうちに、横浜で施術していたオフィスワーク中心の人の筋肉と畑仕事などの肉体労働をされている島の人々の筋肉の違いに気づき、島の人に合う施術方法を研究し、少しずつ施術を工夫していきました。自分達が何者かわかってもらうため、オリジナルの新聞を発行。徐々にお客さんが増え、軌道に乗ってきました。島の人に合った施術や自分たちの事を知ってもらったのがよかったのだと思います。



市部 真吾さん(38) 2013年東京都からIターン

家族構成：夫婦・子ども3人 / 職業：弁当屋オーナー

東京から移住して島の黒糖焼酎メーカーで杜氏をやっていましたが、移住して4年くらい経った頃から、自分自身で開業したいと思うようになりました。まず、これまで経験してきた職歴、得意なことの棚卸しと、成功例と失敗例の書き出しから始め、イタリア料理店でのキッチン経験を生かして、飲食業をやろうと思いました。店舗を構えてお客さんが来店するのを待つだけだと経営的に厳しいだろう、こちらから売りにも行ける弁当屋だったらやれると思い、あえて既に数店舗ある弁当屋に挑戦しました。空き店舗を活用して、自分達夫婦と友人の3人で2カ月かけて内装工事をやりました。新しいもの、きれいなものをではなく不要になったものを、かっこよく再利用したいという気持ちが強く、DIY魂に火が着いて楽しかったです。移住して間もない頃に開業していたら失敗していたと思います。6年間の島暮らしで消防団などの地域活動に参加し、知り合いが増え、島の状況やニーズがわかった上で開業したので見通しはありました。





遠藤 仁司さん(46) 2010年横浜市からUターン 家族構成：夫婦・子ども1人 / 職業：花卉農家

横浜に住んでいた頃に、沖縄の離島を訪れては「島で暮らすのもいいね」と夫婦で話していました。沖永良部島出身の上司のすすめで島を訪れ、3カ月後には移住に向けて再び沖永良部島へ。農業者ブログで知った農園を見学して、その場で働きたいと伝え2カ月後から働けることに。半年という短期間で移住を決めたのは、勤務先が早期退職者を募集していたのが大きいです。住まいは集落の人との交流を求めて、あえて人口が少ない集落で探しました。農園の同僚が大家さんとの面談に一緒に行ってくれたおかげで、スムーズに家を借りることができました。移住して5年間は、花農家としての技術や経営について農園でじっくり学び、新規就農者認定制度を受け就農準備を始めました。新規就農者向け融資を利用して圃場を整え、花の苗を植えた時には、わが子のように元気に育って欲しいと願いました。移住前に比べて、収入は減りましたが支出も減ったので生活レベルは変わりません。むしろ時間にゆとりができ精神的にはゆったりしています。



高 孝一さん(33) 2012年東京都からUターン 家族構成：夫婦・子ども2人 / 職業：漁師

島に帰省した際に、漁師をやっている叔父の船に乗ったのがUターンのきっかけです。2、3日は船酔いが酷く大変でしたが、1週間経つと魚を釣り上げるという感覚が楽しくなり、職業としての漁師を意識すると同時にUターンを決めました。漁師に引かれたのは、頑張れば頑張った分の釣果を得ることができ、ミスをしたら自分に返ってくる、全て自分の責任でやることです。もちろん収入面の魅力もありました。Uターン後、漁協の新規就業支援制度を利用して、先輩漁師の船で2年間の研修を受け、操船の仕方、魚群探知機の見方、GPSの見方、船の故障時の対応など先輩漁師のやり方を見て覚えました。何も知らない素人でしたが3年経つ頃には一人で稼げるようになりました。漁師を目指している人に伝えたいのは、常に覚悟が必要だということですね。沖の漁場まで行って何が起ころうかわかりませんし、何かあった時には自力で帰ってこなくてははいけません。年に1、2回大物のクロマグロを釣り上げた時が漁師の魅力を改めて感じる瞬間です。





秋元 雄拓さん(37) 2016年東京都から1ターン 家族構成：夫婦・子ども2人 / 職業：美容師

ボランティアで訪れたインドやネパールで感じた、心の平安や平和を意味するサンスクリット語の"シャンティ"な場所で将来は暮らしたいと漠然と思っていました。義祖母の米寿祝いで初めて沖縄永良部島を訪れました。島で過ごした数日間、インドやネパールで感じた"シャンティ"な感覚が甦ってきました。それをきっかけに、島への移住を考えはじめ、移住に向けてスキル磨きに2年かけました。移住1カ月後に1000円カット専門店をオープン。しかし1000円カットのみでは経営的に厳しく、お客さんから「こんなに安くて大丈夫？もう少し上げてもいいよ」と言って頂いたこともあり、2年目にはサービスメニューの見直しと価格の値上げをしました。移住してよかったのは、家族との時間が増えたことです。東京にいた頃は、仕事が終わって急いで帰ったとしても帰宅が夜の9時過ぎ、その時間に既に子どもは寝ていて、子どもとの時間を持つのは無理でした。島に来てからは子どもと一緒に風呂に入って、夜7時頃には家族でご飯が当たり前になりました。



林 秀池さん(35) 2016年那覇市から1ターン 家族構成：夫婦・子ども2人 / 職業：学習室室長

移住半年前に、妻の実家近くの施設で職員を募集しているという話を聞き、2018年4月に沖縄から移住してきました。若い頃から海外留学を含め数箇所に住んでいたこともあり、一箇所に定住するという意識がありませんので、短期間で移住に踏み込めたのだと思います。移住して半年経った頃から、島の子どもたちに英語のおもしろさを伝えたいという思いが強くなり、沖縄でやっていた英語塾を始めることにしました。移住者が始めた塾に子どもがきてくれるのが不安でした。一方では、体験すればリピーターになってもらえる自信があったので、アンケートに回答いただく条件で1カ月間の無料体験を設けました。ほとんどの方に継続していただきました。2020年から小学校英語が始まるので、タイミングが良かったです。島には、何かを始める時にSNSよりも、濃密な人とのつながりが生まれる環境があります。移住者にとって戸惑うこともあるとは思いますが、その背景を理解すると暮らしやすくなると思います。





沖永良部島は、鹿児島市から南へ540km、北緯27度線の上に浮かぶ周囲55.8km、
 面積93.8km²の隆起サンゴ礁の島です。和泊、知名両町合わせて人口1万3千人あまり。
 鹿児島空港から飛行機で1時間10分・那覇空港から飛行機で1時間。年間平均気温
 22度という温暖な気候に恵まれ四季を通じて熱帯、亜熱帯の花々が咲き、エラブユリ、
 スプレーキクなどの栽培も盛んです。東洋一の鍾乳洞「昇竜洞」をはじめ200～300の
 大鍾乳洞群が見られ「花と鍾乳洞の島」の異名をとっています。また、奄美諸島の
 中でもハブがいない島として知られています。澄みきった青い海と空、まばゆい
 太陽、素朴で厚い人情は、あなたにとって忘れ得ぬ思い出を演出することでしょう。
 ぜひ、沖永良部へ「めんしょうり」(いらっしゃいませ)。